

Pioneer

最先端を走る同窓生に今を語って頂きます

広瀬 治子氏

山口大学農学部 獣医学科 1979年卒業
山口大学医学部 医学博士号 1990年取得

～ 山大獣医解剖で出会った電子顕微鏡に魅せられて40年 ～

入学式の後、一人で農学部獣医学科の探検に出かけました。うろうろしていたところを、農芸化学の田中丸先輩に声をかけていただき、獣医の高田先輩に研究室を案内していただきました。その時「世界的に有名な先生がいるのでぜひ解剖に入りなさい」と勧められ、何もわからないままに解剖に入り、生涯の師となる牧田先生と電子顕微鏡に出会いました。電子顕微鏡は、肉眼では観えないナノの世界を観ることが出来る、興味深い装置です。それから40年、電子顕微鏡は、今現在も私の好奇心を満たしてくれる道具（おもちゃ）で、主人には「電顕おたく」と言われつつ仕事をしています。ただ、このおもちゃは高額で、写真の電顕は3億円近い装置です。

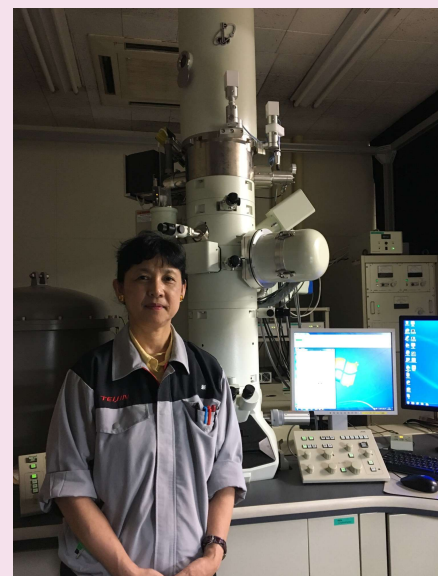
電子顕微鏡には、主に表面の微細構造を観る走査型電子顕微鏡（SEM）と内部の微細構造を観る透過型電子顕微鏡（TEM）があります。学部時代にSEMは使えるようになったのですが、TEM像は1枚も撮れませんでした。その頃牧田先生がアメリカに行かれることになり、山大医学部微生物学教室の吉井教授のところでTEMの勉強をすることになりました。この教室に研究生として席をおいたまま就職・結婚し、子供が生まれたこともあって、卒業後10年かかって、医学博士号を取得しました。

最初の就職は、吉井教授から「東京の電顕メーカー『国際精工』にいったはおの一言で、就職が決まり、同時に同級生と結婚（結婚生活37年を迎えます）。「国際精工」は日本電子（世界3大電顕メーカー）から独立した小さな電顕メーカーでしたが、世界初の装置を開発していました。生物用に新しい機能をもったTEMを開発しており、このために新しいアプリケーションの開発が必要となり、約10年ここで仕事をしました。「超広視野観察」という新しい観察方法をつくり、電子顕微鏡学会から技術賞をもらいました。この手法は新しい観察方法であることから、国内外の著名な先生と一緒に仕事をするチャンスに恵まれました。この会社で所長になるまでがんばるつもりでしたが、会社が都内に引っ越すことになり、「引っ越しか転職か」と悩んだすえ、まだ子供が小さかったこともあり、電顕の仕事を続けられる近くの帝人（徒歩10分）に転職することにしました。

この転職は、前職で一緒に仕事をさせていただいた、電顕の世界では著名な日本女子大の大隅教授の紹介でした。そのころ、帝人は、まだ電顕での解析力が弱く、それまでの経験を生かして、帝人製品の異常解析や商品開発のために、電顕で重要なデータを示すことが出来、転職2年で管理職となり、現在までにTEMを3台、SEMを3台買ってもらいました。

帝人入社から26年、いろいろな形態解析の仕事をしてきましたが、その中でも、現在進行形の、バイオミメティクスとバイオマテリアルの仕事が面白い仕事です。バイオミメティクスとは、生物の形状や機能を模倣して工業的に応用する技術のことで、帝人ではモルフォチョウの翅の微細構造を模倣して作った、繊維やフィルムが世界的に有名です。現在、バイオミメティクスのISO国内審議委員のメンバーとして、国内での啓蒙活動をしています（添付は子供や一般向けの本です）。この他、電子顕微鏡の仕事を通じて、日本顕微鏡学会常務理事（～2016）、医学生物学電子顕微鏡技術学会理事、北大リーディング大学院のプログラム委員、文科省NISTEP調査員など、社外の仕事も引き受けてやっています。

山大で出あった人達と電子顕微鏡を基盤に、色々な分野の人と出会い、その出会いから仕事が広がっていきました。環境と健康がゆるせば、70才まで会社で仕事が出来そうですので、今の仕事を続けつつ、社会に貢献する仕事（学会活動として約6000人の子供達に電顕体験教育を行ってきました）も続けていきたいと思っています。（帝人株式会社 構造解析センター 形態構造解析グループリーダー）



藤田 陽偉 先生

獣医学科12回生 元OIEアジア太平洋地域代表



私たちが勉強したのは、下関市長府の古い建物の頃でした。特に獣医学科の施設は何時取り壊してもおかしくないような状態でしたが、そんな中でも学生たちはまじめに勉学に取り組んでいたことを思い出します。

学校を卒業してから農林省（今の農林水産省）へ採用され、はじめは動物衛生の仕事が中心でした。しかし、学生時代からいずれは国際公務員又は国際関係で働きたいという希望をひそかに持っており、農林水産省においても徐々に国内の仕事ばかりではなく、海外の業務にもタッチさせていただく機会に恵まれました。同省農林水産技術会議事務局国際研究課長を拝命し、国際と研究の両面を4年半も経験させて貰いました。着任時には

丁度アメリカとの間で基礎研究とその情報問題の扱い（いわゆるシリコンバレー事件）が極めて大きな問題となっており、そのためアメリカとの協議に何度も出張したことを思い出します。わが国は、各省から代表者がアメリカに出向き、関係者とのやり取りを続けるほか、大人数のアメリカの関係者をわが国に呼び、各分野の試験・研究現場を見てもらい、率直な意見交換を通じて理解を高めてもらうことに努力しました。私もこの時の経験を生かして、知り合いになった米国関係者に農林水産分野の日米二国間協力取極めを米国農務省と新たに結ぶことを提案しました。アメリカ側も話に積極的にのってきただけでなく、当方もこのための新規予算をいただくことができて、日米間協力取極めが成立しました。アメリカでは大学研究も農務省が窓口となっていて調整していましたので、この新取極めにより農務省関係のみならず幅広く日米間の農林水産試験研究分野で貢献ができることを願ったものです。

その後、同省畜産局衛生課長を拝命しましたが、この頃国際公務員で仕事をするのを忘れることができず、任期途中で国連食糧農業機関（FAO）の試験を受けることとしました。たまたま運が良かったため、FAO本部の畜産部長に採用が決定しましたので、衛生課長を辞し、ローマに赴任しました。

赴任にあたって当時、国連は極端な財政逼迫の時でしたので、早急かつ大幅なリストラ実施を要求されました。予算の削減、退職者の選定、事業プログラムの変更を余儀なくされました。体（てい）の悪い首切りのために採用されたようなものでした。しかし、苦しい時には以外と思い切ったことができるもので、世界の畜産振興のためには、国連機関として従来の分野別縦割り方式の仕事の進め方を改め、横断的に業務を進める必要があることを関係者に訴えてリストラに踏み切りました。そうして新たな組織運営方式と業務分野を取り入れることができました。これは一緒に苦労して働いた多くの仲間たちの協力がなければできないことでした。

その後、OIE（国際獣疫事務局、本部パリ）アジア太平洋地域代表となり、10年間動物衛生業務に従事することとなりました。当時、BSE（牛海綿状脳症）の発生問題などがある他、鳥インフルエンザがアジアで発生し、世界に伝播して各地で人獣双方に被害が広がり、また経済的にも大きく混乱したことから、年間20～30回世界各地に海外出張をする必要が生じ、日本にいる時の方が少ない状況でした。

この頃同時にどういう具合か、国際畜産研究所（ILRI、本部ケニア）の理事にも就任することとなり、OIEに加えてILRI（世界で唯一の国際畜産試験研究機関）の関係で色々の国へ出張することとなりました。

こうして図らずも、国内のいくつかの畜産関係機関に席を置くと同時に国際的にもよく知られた3つの国際畜産機関すべてに従事することができ、学生の頃から希望していた国際公務員を経験させていただきました。

わが国は一時期ODA世界一を誇る国柄でしたが、経済協力面を除いて意外と他の国とのつながりが薄いのではないだろうか、国際機関で働く前から危惧していたところでした。実際に国際機関に入って他の多くの国々の人と一緒になって働いてみると、日本が国際的にどう位置付けられているのかということを感じることができました。

今までは日本人が国際の舞台で直接関与する機会がいかにも少ないように思われてなりません。日本の立場を国際の場で保持するためにも、わが国のレベルアップは今後とも必要不可欠です。これからの若い人たちに国際の場で世界の農林水産分野の発展のためにがんばってもらえることを期待しているところです。

母校便り：共同獣医学部 獣医内科学教室

●**在籍者** 教員3名（奥田，馬場，上林）

院生2名（D3；小林，D2；大草）

学部生7名（V6；市川，辻，及川 V5；大下，大橋，三宅 V4；溝口）

院生も含めて小動物臨床と研究の日々を送っています。

小林氏は論文執筆中で，学位審査に向けて鋭意準備を整えています。

学部学生は授業実習に忙しい日々を送っています。

●**診療** 内科系教員5（内科3，臨床病理2；水野，根本）

外科系，繁殖，大動物の教員や研修医，VTらスタッフの方と二次診療を行っています。

●**進路** 山口大学ご出身の下川孝子先生（助教）が岡山理科大学へと赴任，准教授としての栄転です。

特に腎泌尿器科に力をいれておられ，山口大学で現在血液透析が行えるのは先生のご尽力の賜物です。

代わりに卒業生である上林聡之先生が助教として赴任いたしました。

学部生では，昨年度ご卒業の濱さん（研究演題；オーロラキナーゼ阻害剤による犬リンパ腫細胞の増殖抑制効果）が大阪市に就職いたしました。



山大OB・OG会(東京)便り

★番外編★

<IR実施法案の採決の我が家>

衆議院の内閣委員長である山際代議士の功績のひとつとして、IR実施法案（特定複合観光施設区域の整備に関する法律）の採決が挙げられる（らしい）。採決時の野党議員との攻防は、トップニュースで報道ステーションでも大きく報道された。その番組を一緒に見ていた小3の娘は「山際君怪我していないかな？」と心配しておりました。実は、前回の選挙で5回目の当選を決めたとき、入浴中だった私に、彼女は「山際当選したよ」と伝えに来たのでした。その際、パパは友達で、昔から山際と呼んでいるけど、パパの友達を呼び捨てにしないと話していたので、彼女の成長を喜びました。

先日山際の選挙区に行くことがあり、ポスターを見つけるたびに<山際さんのポスター>と叫んでおりました。なんか成長している～～。

小1の娘は、BSのプライムを見るたびに、山際君出てるの??とっております。こちらも今後の成長が楽しみです。しかし、いつ撮影したのかな??というポスターですね。（中嶋 久士 C23, H5卒）



お知らせ

共同獣医学部同窓会「青山会」について

今から6年前（平成25年）、山口大学農学部獣医学科は山口大学共同獣医学部へ発展的に昇格しました。これはグローバル化が進む昨今、食の安全性や感染症への不安が世界的に高まる中、我が国の大学設置基準の一部が改訂され、2012年鹿児島大学との共同獣医学部設置がきまりました。翌年新入生（鹿児島大学、山口大学それぞれに）が入学し、今年平成30年3月19日、その学部第1回生26名が卒業しました（詳細はこのニューズレター4ページ、木曽前共同学部長の小講演参照）。

共同獣医学部在学時は入学時、農学部同窓会に入会金は支払っていますが、農学部同窓会規約には獣医学部学生の会員として記載がありませんでした。悲願である獣医学部に昇格したこともあり、関係者の間で同窓会も獣医学部として創設しようと言う事になり、獣医畜産専門学校、農学部獣医学科、連合獣医学研究科、今春新たに創設される共同獣医学研究科（大学院）と縦軸に繋げる同窓会組織が準備され、今春3月山口大学共同獣医学部同窓会（青山会）が発足しました。

現在農学部同窓会に所属している全国の獣医系同窓生は、順次共同獣医学部同窓会へ移行していただくことになります。そのための案内や手続きなど適時連絡させていただきます。

東京（関東）地区はしばらくの間、農学部・共同獣医学部、合同同窓会としてやっといこうと考えています。（深町輝康）

【山口大学のホームページを開いて頂き。“同窓会”、“獣医学部”“ご挨拶”をクリック頂くと詳細が述べられています。】

